

『音韻闡微』の反切法をめぐって

浦山 あゆみ

反切が用いられるようになってから、漢字の注音法は飛躍的に発達したかのようにみえた。けれども反切も決して万能の注音法でなかったことは、その後も直音が併用された事実をみれば明らかであろう。そもそも反切という方法が、漢字二字を使つて一つの漢字の音を表記しようとするものである以上、無駄な部分まで現れてしまうという欠点をともなう。すなわち反切上字の韻尾と声調、反切下字の声母の部分は余計の部分であり、反切を口唱して音を取り出す際に障碍となつてしまうのである。時代が下るにつれ、これら障りとなる部分を取り除いた反切を作成しようとする動きがみられ、清朝になって規範的かつ画期的な反切法を明示した韻書が出現する。『音韻闡微』である。

『音韻闡微』は、康熙五十四年（一七一六）に李光地・王蘭生らが康熙帝の勅命を受け、編纂を開始し、雍正四年（一七二六）に完成した官修の韻書である。この書の反切法の原理はそれまでの韻書などにみられる反切法に比べて、実に合理的である。既成の韻書である『広韻』『集韻』などを尊重しつつも、それらの反切に従い難い点があれば改め、新たに「今用」「合声」「協用」「借用」という反切を設け、音の実際に対応しようとして試みている。その方法は大掴みにいえば、反切を口唱する際に障碍となる部分の少ない文字を反切用字に選ぶものである。この反切法は高い評価を受け、いまなお「反切改良史上の殿軍に位置するもの」と賞

されている。筆者はかつて、『音韻闡微』と『音韻須知』の反切を比較し、『音韻闡微』の反切作成法が満洲字母のみによって創案されたものとはいいたいことを検討した。このたびは、別の側面からこの問題を考察する。

『音韻闡微』の「凡例」の記述により、清末の学者胡垣をはじめ、耿振生氏、林慶勳氏はみな『音韻闡微』にみられる未曾有の合理的反切法は、それまでの韻書等の反切改良の基盤のうえに、新たに「国書十二字頭」すなわち満洲字母の原理に啓発をうけて成立したものとし、この考えが現在のところ、ほぼ定説となつているといえる。

ところで、『音韻闡微』より三十年ほど前に刊行された『問奇一覽』の「切韻捷法」では、

今正以喉腭舌齒唇、自下而上、一氣天然、嬰兒出胎、嗚哇一聲、即是萬音之根、…

〔問奇一覽〕卷下「切韻捷法」
と記したうえで、所収の韻図声母を喉音（影母）から始めている。喉すなわち「影・喻」母の調音部位より息を出すことが、すべての音の根本であるというこの考えは、反切にゼロ声母・ゼロ韻尾の文字を用いる方向へと至るものであり、そしてそれは、『音韻闡微』にも通じるアイデアといえるものである。

官修の韻書である『音韻闡微』と文字学書『問奇一覽』の方向性に共通するものがあるというのは、一見飛躍的に思われるかもしれない。しかしながら、李光地の『榕村全集』では次のように書かれている。

惟邵子於聲類以歌韻首列、而辭曲家每字收聲皆歸影母者、乃爲得其遺意。然邵之諸部既不盡合、而度曲者又悟收聲、不知

其爲生生之本、故亦不能舉而措之而皆通也。然收聲之法釐爲六部、此則確爲聲樂本要、而國朝字頭亦合焉。

〔榕村全集〕卷二十

この辞曲家あるいは度曲者とは、具体的に誰を指すのかは定かではないが、その文章の構造からみて、辞曲家も度曲者も同様の者と考えられるであろう。また、別の箇所でも李光地は、

臣反覆詳看、其韻部次第、及等切法律、皆有條理。蓋古今韻部、惟本朝十二字頭爲得天地之元聲、符三代之古法、今崑山樂工及士大夫識韻學者、頗能辨其部分、有條不紊、然一概沿唐人之舊、以東冬江等爲弁首、終不如本朝字書冠之以えりり一類。

〔榕村全集〕卷二十九

と記しており、さきの辞曲家および度曲者とはこの崑山の樂工をも含めた言い方であると思われる。李光地はさらに、

將來把毛稚黃書及度曲須知擇其精要語附刻於後、便完成書。

：(中略)：毛稚黃書及度曲須知亦曉得支微齊歌麻魚虞七部之字無頭、它部之字皆有頭。

〔榕村全集〕卷三十一

ともいつている。

『問奇一覽』の「一切韻捷法」が、明末清初に大きな影響力を持った戲曲理論書『度曲須知』を承けて成立したものであることは、昨年度の本発表において報告したとおりである。また、『問奇一覽』の校訂者は朱素臣という戲曲作家であり、彼は同じく明末清初の戲曲作家である李玉などとも交流があった。その朱素臣が書いた『十五貫』は崑曲の代表作の一つである。李光地の言う「崑山の樂工」とはとりもなおさず、崑山腔すなわち崑曲の役者たち

にはかならない。「崑山の樂工」が「頗る能く其の部分を辨じ」るのであれば、崑曲を作成する者も当然それができたに相違ないのである。

以上を括れば、次のようなことが見えてくる。「音韻闡微」の反切作成法は、確かにそれまでの反切改良史を承けて成立したといえる。そしてまた一方で、曲韻の書などにおいても「音韻闡微」の反切へ至る前段階まで達し得ていた。しかも「音韻闡微」の編者李光地はそれらの戲曲関係の書物を目にしていたのであるつまり、「音韻闡微」編纂の際に、その編者が曲韻書等を参考にし、ヒントを得ていたと想定されるのである。したがって、「音韻闡微」の反切法がその「凡例」に強調されるほど、滿洲字母の啓発を事実を受けているか否かは、再考の余地があるといえるのである。